



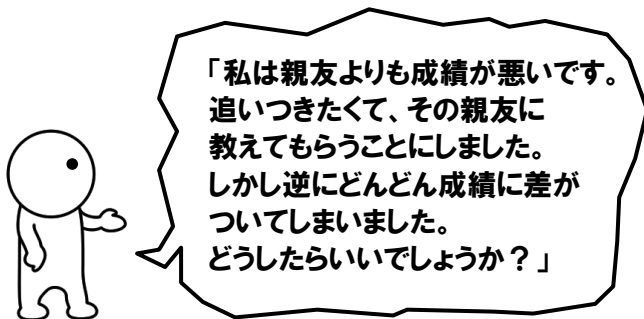
夏見台幼稚園・保育園 ニュースレター 2025.8.15 号

夏見台幼稚園・保育園でのこ
わりをニュースレターにまとめます。どうぞご覧ください。
※配信停止の方はメールでどうぞ (info@treponte.jp まで)

〒273-0866 船橋市夏見台 2-16-1 夏見台幼保園

教わるより教える方が成績が上がるのはなぜか

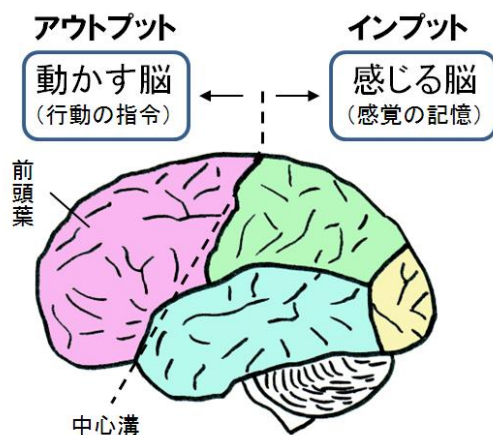
ネットの記事にこのようなものがありました。
ある中学生からの質問です。



良かれと思って勉強を教わったらますます差がついた、という笑えない(?) 話です。

人に勉強を教えるには準備が必要です。順序だててわかりやすく伝える工夫も求められます。相手の反応もすぐ返ってきます。「わからない」と言われたら、もう一度説明をやり直します。

教える側は「主体的」に忙しく頭を働かせています。一方の教わる側は「受動的」に説明を待ちます。これを脳の機能としてみると…



人間の脳は、よく左脳・右脳と区分されますが、前脳・後脳という分け方もあります。

前脳:前頭葉(意志・実行・命令)

後脳:後頭葉(目の情報の処理)

側頭葉(耳の情報の処理)

頭頂葉(空間認識)

後ろで「感」じて、前で「動」かす。だから「感動」といいます。脳は全的に働かせた時が最も活性化するといえます。知識も定着します。

教える側(先生)は、インプットした情報をアウトプットしています。教わる側(生徒)は、インプットだけです。当然、教える方の頭の方が忙しく働くことになります。インプットとアウトプットを行ったり来たりします。

例えば読書を例にとりましょう。ただ本を読んで「ああ面白かった」。これで読書は終わります。インプットオンリーです。

ではその本の内容をみんなの前で説明するようになったらどうでしょうか? インプットの上にアウトプットが必要になります。

本の内容を話す



インプット+アウトプット

読書する



インプットのみ

本を読んだ時点では「わかった!」と思っても、いざ内容を言葉にすると、うまく説明できない、言葉が出てこない、といったことがあります。実は本当に理解していなかったことが明らかになります。

成長とはアウトプットによって促されます。先生や親の役割は、子どものアウトプット的环境を作ってあげることです。

子どもが読書をしている。そこで一言「どん

な話なの？」と聞いてみる。すると子どもの脳は全的に動き出します。

質問とは、埋もれている知識を引き出すカギになります。「？」を投げかけられると、相手の脳の前の方が働き始めます。

ではここから幼児教育の話です。夏見台幼稚園・保育園では、子どもに対することばかけの原則として、

「指示」ではなく「問いかけ」を重視

しています。

日本の幼児教育では伝統的に「一斉保育」が行われてきました。先生の「指示」で子ども集団を動かす保育です。これはこれで、昭和の高度経済成長には都合がよかったでしょう（それどころか、ピアノで子どもを動かすようなところもありますね）。

しかし時代は変わります。できるだけ、一人ひとりを丁寧に見る保育が求められています。

「指示」ではなく「問いかけ」することで、自分の頭で考え行動することが大切です。



↑Youtube で詳しく解説しています。「問いかけを主体」で検索してみてください。

問いかけを主体

Q 検索



それから異年齢クラスという環境。年長が年少に、遊びや生活面でさまざまなお手伝いして

いきます。



しかしこれはまた、異年齢保育のデメリットともいわれます。「年長は年少に足を引っ張られるのでは？」という疑問です。しかしそれは違います。

年長にとっては、はじめての「アウトプット」の機会です。自分が今までやってもらっていたことをやってあげる。そのためには、やるべきことがきちんと整理・理解できていないといけません。インプットとアウトプットの繰り返し作業です。

「できない、どうしよう」という相手の気持ちへの共感も必要です。心が発達していないと上手にお手伝いできないのです。

年長は誇らしげにアウトプットし、インプットオンリーの年少は、2年後にはアウトプットする立場になる。この循環が、子どもの脳を刺激し成長を促します。夏見台幼稚園・保育園ではこうした環境づくりに努めています。

(終)